

ゲーテのスピノザ主義に基づいた宗教的哲学・詩文・芸術・自然研究の概念 (75)

ゲーテのスピノザ主義に基づいた 宗教的哲学・詩文・芸術・自然研究の概念

エヴェリン・ツグラッゲン

はじめに

『ファウスト』第1部 (*Faust I*, 1808) の中で、マルガレーテはファウストに次の有名な質問 (独 *Gretchenfrage*) をしている。「じゃ、話して、あなた宗教のことどう思ってるしゃる？」¹ 本論文の中でヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の宗教概念について、そして宗教と哲学、宗教と詩文、宗教と芸術、宗教と自然研究との関係について論じていく。ゲーテは生涯に渡って何度もこのような関係性について考察しているが、その中で統一できるものがあるかを調べていく。彼は哲学や詩文や芸術や自然研究を宗教 (スピノザ主義に基づいた宗教性) の観点からどのようにとらえているか？

ゲーテは詩文、芸術、哲学と自然研究についての文章と随筆を数多く残したが、それらと宗教との関係についての考察も少なくない。本論文では、ゲーテの宗教についての対話と手紙からなる証言集ハンス・ヨアヒム・シム (Heinrich Joachim Simm) の『ゲーテと宗教』 (*Goethe und die Religion*, 2000) ² という書籍を用いて、特に第5章「詩文は自然の秘密を指向している一宗教と芸術」³ からのゲーテの引用文を参考にし、他の引用文も用いながら「ゲーテのスピノザ主義に基づいた宗教的哲学・詩文・芸術・自然研究

の概念」というテーマについて論じる。

これまでのゲーテ研究において既に明らかになっていることは、スピノザからの影響とそれに関連するゲーテ作品の中で頻繁に現れる汎神論である⁴。本論文では、スピノザのゲーテへの影響を意識しながら、ゲーテの宗教概念を確認し、その使い方と詩文・芸術・哲学・自然研究との関係を調べる。

翻訳に関しての注釈であるが、ドイツ語の Poesie と Dichtung という言葉については、ゲーテは同意義に用いているゆえに、本論文では「詩文」と翻訳する。poetisch という言葉は潮出版社の『ゲーテ全集』で「文学」と「文学の」として翻訳されている個所があるゆえ、本論文において『ゲーテ全集』を使用する場合は、この部分をそれぞれ入れ替える場合がある。「文学」と「文学の」はドイツ語で Literatur と literarisch に該当し、Literatur は Poesie より広い意味がある。Literatur は「詩」と「詩文」だけではなく、一般的な文学を含んでいる。Poesie の意味はだいたい「詩」と「詩作」、 「詩文」に限られており、「文学」一般の意味は含まれていない。これゆえに Poesie と Dichtung の訳として「文学」は適切ではない場合がある。

第1章 ゲーテの宗教概念

第1節 宗教的経験の諸段階

ゲーテは長い人生にあって、子供のころから様々な人物や思想から影響を受けた上に、宗教的経験も重ねてきた。シムの『ゲーテと宗教』(*Goethe und die Religion*, 2000)によって、ゲーテの宗教的経験の諸段階が明らかにされた。シムは次のように述べている。

すなわち最初のプロテスタンティズムに対する批判から、汎神論的宗教観を経て、後の人間主義の理想と晩年の神秘主義に至るが、それは彼が1813年のヴィーラントが死んだ時とエッカーマンとの対話の中で、超越と

輪廻についての自分の考えを詳しく表現しているときである。⁵

この宗教的経験の諸段階では、一つの段階が次の段階に入れ替わるわけではなく、ゲーテの人生経験と宗教経験が一つの段階から次の段階へ深まって、広くなっていった。この過程の中で、彼は人生・生命をさらに深い観点から理解するようになる。

様々な思想を探求していたゲーテはスピノザの『エチカ』に大きな影響を受けて、スピノザの「神即自然」(deus sive natura)⁶の概念を確信し汎神論的生命観を生涯もっていたが、筆者が博士論文「ゲーテにおける『生命哲学』の研究 ―自然詩文・永遠・輪廻・行為―」の中で論じたように、ゲーテには独特な『エチカ』の読み方がある。博士論文の一部を紹介する。

スピノザは「神の諸法則」、すなわち「神の無限なる本性の諸法則」や「自己（神）の本性の諸法則」という言葉を使っているが、ゲーテは「自然は、永遠の、必然的な、神自身でさえなんら変更することのできない神的な法則」であるという表現をしている。ゲーテは「自然」の働きを強調し、スピノザは「神」の働きを強調している。『詩と真実』はゲーテの自伝として見られることから、ゲーテの最終的な「自然」や「神」や「法則」の考察の表明として捉えることができる。ゆえに、彼は自然の中に神的な法則があると信じていた。このように、ゲーテの生命論的宗教観は、主にスピノザに基づくと考えられるが、ゲーテが理解する神の諸法則は、スピノザが述べた法則と異なっている。

（省略）同じく「スピノザ研究」の中のゲーテの「無限なもの」についての考察は、彼の靈魂の不滅の概念だけではなく、彼の輪廻の概念とも関係するということから、スピノザの形而上学の範囲を超えていると考えられる。⁷

ゲーテは1830年6月8日にフリードリッヒ・フォン・ミュラー大臣(Friedrich

von Müller, 1779-1849) との対談で「私にとってキリストは、常に最高に重要な人物ではあるが、問題のある人物でもある」⁸ と言ったことから、ゲーテは教会的な意味では、キリスト教徒ではなかったことが分かる。しかし、スピノザから大きな影響を受けた「熱狂的な弟子」⁹ であったゲーテは純粋なスピノザ主義者でもなかった。なぜなら、ゲーテはスピノザの哲学を独自に解釈し、理解していたからである。二人の神の法の解釈は異なる。その上に、スピノザが直接表現しなかった輪廻の概念を、ゲーテは表現している。

第2節 詩人、または芸術家として多神論者、自然研究者として汎神論者

1813年1月6日のフリードリヒ・ハイน์リヒ・ヤコービ (Friedrich Heinrich Jacobi, 1743-1819)宛の手紙の中で、ゲーテは様々な考え方に興味があると述べている。

私は多様性のある人間なので、一つの考え方だけでは十分ではない。私は詩人として、また芸術家としては多神論者であり、自然研究者としては汎神論者であり、前者も後者も決定的である。私は、自身の人格のために、または道徳のある人間になるために、一つの神を必要とするならば、それはすでにある。天上と地上のものは広い領域にあり、それは万物とそれらの機関が連動するときのみ把握できるのである。¹⁰

この段落では、ゲーテは詩人として、また芸術家として、また自然研究者として、また人間として、神の必要性について述べている。ゲーテは詩人として、また芸術家としては多神論者であり、自然研究者としては汎神論者である。人間としては一つの神で足りているので、ある意味一神教信者ともいえる。ただし、ゲーテが一神教信者として信じているのは、もちろん一つの神ではあるが、それは汎神論的な神であろう。

自然研究者としてゲーテは、スピノザの「神即自然」(deus sive natura)の概念を用いて自然を汎神論者の目で研究している。すなわち、自然のすべてのものの中に神的なものを探し、認識している。1785年6月9日に書かれたスピノザ主義についてのヤコービ宛の手紙の中で、ゲーテは「私はいたるところで神的なものを草や石のなかに探している。」と「この神的存在を私は個々の事物から、そしてそこに内在するものから認識している。」¹¹と述べている。彼は自然を神の表現として捉えて、すべての草や石の中でも神的なものを見ている。自然研究者として、自然の中のたとえ小さいものの中でも神的なものを探している。この意味において、ゲーテにとって自然研究は、自然を研究し、発見することだけではなく、最終的には神的なものへの探求であるといえる。自然研究は、ゲーテが表現している「自然は、永遠の、必然的な、神自身でさえなんら変更することのできない神的な法則」への理解を深めるためである。不可説なものを説明できるようになるための挑戦であろう。したがってゲーテにとって自然研究は、まずは神的なものを認識するためである。

ゲーテは詩人として、また芸術家として多神論者である。彼は詩人として、自分の作品の中で様々な文化や宗教の聖者や神々を紹介している。そして、ゲーテはそれらから受けた様々な考え方や印象を自分の言葉で表現し、場合によっては、そこから自身の生命観も表現している。例えば「マホメットを歌う (Mahomets Gesang, 1772-73)」¹²という詩は、未完に終わった戯曲『マホメット』に関するものであり、マホメットというゲーテにとっての宗教的天才についての詩である¹³。

ゲーテは新しい模範や新しい意味を生み出す人物として、キリスト教の聖者や聖フィリッポ・ネーリ、聖ロクスといった人々に加え、他に何人もの神話や歴史上の人物、そしていくつもの『教派』を再発見した。ペラギウス、ムハンマド、ファウスト、アハスヴェール、プロメーテウス、ルシファー、タンタロス、イクシーオーン、シーシュポス、スピノザ、マキャヴェッリ、アリウス派、あるいはヒュプシスト派などである。ゲーテは自分を異端者で

あると感じ、特に救世主としてのイエス・キリストとの間が損なわれ、それによりキリスト教信仰の核心部分との間も損なわれた関係となった¹⁴。

ゲーテは1830年6月8日にミュラー大臣との対談の中で「私にとってキリストは、常に最高に重要な人物ではあるが、問題のある人物でもある」¹⁵と言った。以上からキリスト教の聖者と、神話や歴史上の人物と、いくつもの教派が、ゲーテの作品の中に現れることから、ゲーテは、確かに詩人としては多神論者であったことが分かる。

第3節 ゲーテの人生と作品の下地をなしている宗教的考察と信仰

『ゲーテと宗教』の前書きの中で、シムは次のように述べている。「ゲーテは宗教、そして宗教についての考察を彼独特のやり方で、自らの作品や言葉に統合した。その際、彼は常に反論の自由を自らにゆるし、それは自分自身の立場に向けられることさえあった。」¹⁶ この証言集を通して、シムは「ゲーテの宗教的考察、いや信仰こそが、彼の人生と作品の下地をなしていることと、彼の世界観や言葉を決定しているという点」¹⁷を示したいと述べている。シムはさらに「どこに隠れていようと神秘的なものを顕示することは彼のねらいだった。しかし彼は同時に自分が本当に信じているものを隠そうとし、あるいは詩的形象において把握しようと努めた。それにより宗教に関する問題においてもゲーテの基本的な思考パターンが示される、すなわち矛盾の統一、対極性や高進の意味における総合がそれである。」¹⁸と述べている。では、ゲーテは生涯に渡ってどのような宗教思想に興味を持って、探求してきたかを紹介する。

ゲーテの生命観は、基本的に汎神論的で、スピノザ哲学から強い影響を受けた。しかし、それにも関わらずゲーテは生涯をかけて、あらゆる哲学思想や宗教に興味を持って研究し、新しい知識を得た。ゲーテが探究した宗教思想は主にキリスト教¹⁹、ユダヤ教、イスラム教²⁰、ゾロアスター教（独 Parsismus, Zoroastrismus）、ヒンズー教²¹、仏教²²などである²³。

ゲーテは『秘儀』(*Die Geheimnisse*)の叙事詩の断片を1784・85年に作成した。その中に出てくる予定であった12人の騎士は、12の宗教を代表していたはずである。彼は1815年8月3日にスルピッツ・ボワスレー(Sulpiz Boisserée, 1783-1854)との対話の中で「『秘儀』は他の多くのものと同じく、大きすぎるスケールで執筆が始まった。—12人の騎士は12の宗教(?)を代表するはずで、そのすべてをわざと混沌と掻き乱し、真実は童話として、童話は真実として現れるはずである。」²⁴と述べている。

ゲーテは、様々な宗教を研究し、常に「真理」と「神的なもの」への探求の精神を表した。そして『ファウスト』の中で述べられている、ファウストのゲーテ的な問いである「世界をその最も奥深いところで総べているものをこれぞと認識することもできる」²⁵ということは、まさにゲーテの探究心を象徴しているのではないか。

ゲーテはすでに若いころから詩と宗教の関連性に気づいている。彼は、例えば聖書の文章に影響を受けたといわれている。ヘルムート・ティーリケ(Helmut Thielicke, 1908-1986)は『ゲーテとキリスト教』(*Goethe und das Christentum*, 1982)という著作の中で「キリスト教——もちろん無修正で伝統から取られたキリスト教ではない!——は彼の生涯の伴侶となったし、聖書は、彼の思考に常に活力を与え、その思考の長い行程で思考の決定要因にさえなり、とりわけ彼の言語に命を与えた」²⁶と述べているように、ゲーテの原語は聖書の言葉で溢れている。聖書以外にゲーテは、他の古典的宗教的作品から影響を受けて、『詩と真実』(*Dichtung und Wahrheit*)の第2部第6章の中で次のように述べている。

古代のひとびとや学派において私にもっとも気に入ったのは、詩と宗教と哲学が完全に一つにとけあっているということであった。そして私にはヨブ記、ソロモンの雅歌や箴言、およびオルフェウスやヘシオドスの歌は、私のあの最初の意見にたいして適切な証明をあたえてくれるように思えたので、私はいっそう熱心に私の意見を主張した。²⁷

ゲーテはこのように古代の人々と学派から感銘を受けたゆえに、それはまた彼の執筆活動に影響を与えたといえる。詩と宗教と哲学を別のものとして捉えることは多いと思われるが、ゲーテはこの三つのものがそろった場合のある種の力に感づき、ゆえに哲学が含まれた宗教的詩文にものごとを統一できる力を感じ、同じような統一感を自身の作品にも生かそうとしていたと考えられる。

第4節 宗教性は多作の条件

ゲーテは1810年の7月にフリードリッヒ・ウィルヘルム・リーマー (Friedrich Wilhelm Riemer, 1774-1845) と対話し、次のように述べている。

人間は宗教的であるかぎり、詩文と芸術において多作である。これを失うとたんなる模倣とくりかえしにおちいる、我々の古代に対する関係のように。古代のモニュメントはどれも信仰から作られたものであったが、我々は、幻想的なあそびのため、このモニュメントを、ただ幻想的に模倣するだけである。²⁸

芸術と詩文における古代のモニュメント、芸術作品を鑑賞し、研究した結果、ゲーテは、人間が多くの作品を生み出す鍵は、人間の宗教性にあると結論つけている。ゲーテはこのような古代の作品がよく模倣されてしまうことを残念に思っている。彼はイタリア旅行で鑑賞した芸術品において、宗教と芸術の一体感を感じ、芸術家の宗教性を感じたのは間違いない。さらに、古代の詩文と作品においてもゲーテはこのような宗教性を見出していると思われる。

第2章 ゲーテが考える詩文と宗教と哲学の関係性

第1節 ゲーテの詩文と宗教と哲学の古典的な見方

ゲーテの考察によると、古代の人々や学派の特徴は「詩文（文学）²⁹と宗教と哲学が完全に一つにとけあっている」³⁰ということである。この特徴は彼を魅了していた。古代の人々と学派は人間の最も高い思想、信仰でもある宗教と哲学を、詩という芸術的な文学表現の中で表している。ゲーテがここで述べている「哲学」は、宗教における哲学思想として捉えればよい。同じ『詩と真実』の第2部第6章の中で、ゲーテは宗教に含まれている哲学と、含まれていない分離した哲学を区別し、比較している。彼は「私が、哲学はすでに宗教と詩文（文学）³¹ (Poesie) ³²のなかに完全にふくまれているのであるから、それだけ分離した哲学は必要がないと主張したことであった。」³³と述べている。ゲーテは、宗教においても、詩文においても哲学が含まれていると思っている。そうであれば、宗教の中でも、詩文の中でも哲学が見出せるはずである。したがってゲーテによると分離した哲学は必要ではない。分離している哲学は宗教あるいは信仰に基づいていないからである。

ゲーテは以下の箇所でも詩文と哲学を比べている。そこからゲーテにとって「哲学」は「理性」であることが分かる。彼は1807年の春に次のように述べている。

神秘主義とは、未熟な詩文（文学）(Poesie) ³⁴、未熟な哲学。

詩文（文学）³⁵ (Poesie) ³⁶とは、成熟した自然。

哲学とは、成熟した理性。

詩文（文学）³⁷ (Poesie) ³⁸は自然の秘密を指向し、これを形象 (Bild) ³⁹によって解こうとする。哲学は理性の秘密を指向し、これを言葉によって解こうとする（自然哲学、実験哲学）。

神祕主義は自然と理性の秘密を指向し、これを言葉と形象によって解こうとする。⁴⁰

ゲーテによれば、自然の秘密を指向するのは詩文であり、理性の秘密を指向しているのは哲学である。ゲーテは詩文を自然と、哲学を理性と関連させている。それゆえに、詩文は自然の秘密の表現として捉えればよい。シュトゥルム・ウント・ドラング」(Sturm und Drang) (『疾風怒濤』, 1765-1785) の代表的な作品である『若きヴェルターの悩み』⁴¹ (*Die Leiden des jungen Werthers*, 1774) の中で、自然を描写するエピソードが多くある。さらにこの作品の中で「心」(独 Herz) という言葉がよく用いられている。この意味では、詩文は「心」の表現としても捉えることができる。この点については以下でさらに詳しく論じていく。

『詩と真実』の第2部第6章の中で、ゲーテは詩文と宗教の共通点について次のように述べている。

というのは、詩文(文学)⁴² (Poesie)⁴³ においては不可能なものにたいするある種の信仰が、宗教においては不可説な(不可測な)⁴⁴ もの(Unergründliche)⁴⁵ にたいする同様な信仰が生ずるはずであるから、自分の分野においてその二つを証明し解明しようとする哲学者は、非常に不利な立場におかれているように私には思えたからである。それにまた、一人一人の哲学者が他とは異なった論拠を求め、ついには懷疑論者はあらゆるものに根拠も根底もないと公言するにいたったことは、やがて哲学史によっても証明されたからである。⁴⁶

詩文と宗教の共通点は、不可能なものや不可説なものに対する信仰である。エッカーマンによるとゲーテが書き、話したすべての言葉は、神が「究めがたいものであり、人間はそれについてただ、その現れてくる痕跡と予感をおぼろげに感じているにすぎない」⁴⁷ ものであると述べている。宗教において

の不可説なものに対する信仰は、ゲーテにとって神あるいは神的な法則に対する信仰であろう。

ゲーテの理解によると、哲学は理性に基づいて、すべてのものを理性で説明し、証明しようとする。それに対して詩文は、不可能なものを表現することができる。また宗教は不可説なものを把握している。したがって、ゲーテは不可説なものが存在していることを確信して、不可説がゆえに、哲学者もこれを説明できない、と彼は結論付けた。

以上で述べたように、ゲーテは宗教に含まれている哲学と、含まれず分離している哲学を区別している。上記の引用文の中の哲学は、宗教に含まれず分離している哲学のことであり、詩文と宗教に対する哲学である。理性に基づいている哲学においては、不可能なもの、不可説なものに対する信仰がない。このような哲学においては、目に見える証明できるものが求められている。

ゲーテによると、不可能なものに対する信仰は、詩文において生ずるはずである。彼は『ゲーテの散文からの言葉』(*Sprüche in Prosa*)の中で「迷信は人生の詩文だから、詩人が迷信的であることは何も悪くない。」⁴⁸と述べている。「詩人は迷信的である」とまで言うゲーテは、詩人にある意味で想像性の自由を与えている。詩人には詩の創作において限界が一つもない。ゲーテはさらに1810年の7月にリーマーと対話し「詩人が道徳を説くと牧師よりも、もっと困ったことになる。なぜならば彼は、教訓のため寓話を編みだしたり、衣をきせたりしなければならなくなるから。」⁴⁹と述べている。教訓を与えるために、宗教においても、童話においても、詩文においても寓話が使われることも少なくない。想像性豊かな寓話は現実の範囲を超えている。

ゆえにさらに詳しく解釈するためにゲーテの童話についての次の考察を用いる。「童話とは、わたしたちにとって不可能なできごとを、可能もしくは不可能な条件のもとで、可能なものとして叙述するもの。」⁵⁰ 詩文と童話においては著者の想像性が働き、物語が生み出される。書かれたものは理性の範囲を超えて、幻獣などが出てくる幻想世界を描写することもある。詩文と

童話と宗教においては目に見えない世界、例えば死後の世界、人間の魂、神、悪魔なども描写または表現することができる。

もちろん哲学においてはこのようなテーマも扱われているが、基本的に理性、または批判が基盤となる。それに対して、詩文、童話において、さらに宗教においても、理性と批判ではなく、主に信仰と想像性が基盤となっている。信仰と想像性を踏まえた文学的表現に対して、現実を踏まえた文学的表現もある。ゲーテは「小説とは、わたしたちにとって可能なできごとを、不可能もしくはほとんど不可能な条件のもとで、現実のものとして叙述するもの。」⁵¹と述べている。ゲーテにとって小説は、現実の範囲における話である。ただし、その中に目に見えない、計器で計れない「愛」「悲しみ」「怒り」などの人間の感情が描写されることもあるが、それは現実世界に限られた目に見えない感情である。従って小説などの現実を語るものと哲学の理性に対して、詩文と童話と宗教は不可説なものを語ることを可能にする。

第2節 ゲーテが考える詩文と宗教の役割

アレッサンドロ・マンゾーニ (Alessandro Manzoni, 1785-1873) の讃歌に関連して、ゲーテは詩文と宗教の関連性について「時代の様々な出来事のために人々が分裂するとすれば、宗教と詩文は全世界を厳粛で深遠な奥底の部分で結合する。」⁵²と述べている。この世に人々を分裂させる力が、数多くあるという現実を意識しながら、ゲーテは宗教と詩文の中に、人々を結合させる力があることを見出している。以上で述べたように、ゲーテによると宗教の中に含まれている哲学があるゆえに、宗教と分離した哲学は必要ない。言い換えれば、信仰を基本とした哲学が求められている、と。このような哲学が世界を結合する力を持っている。

さらにゲーテは1815年4月27日のフリードリッヒ・ウィルヘルム・フォン・トレブラ (Friedrich Wilhelm Heinrich von Trebra, 1740-1819) 宛の手紙の中で「詩文が個別なものへの関心を越えて、全体的展望へと我々をいざなうと

き、それは常に調和的なはたらきをもつ。」⁵³と述べている。全世界の人々を結合する調和的な力は、あらゆるものを結びつける善なる力であるが、それに対抗する力、分離する力もある。いつの時代でも分離する力が働く中では、結合する力が必要であろう。

結合するものはなんであろうか。ゲーテによれば、それは心または信仰である。理性に対しての心、または疑問に対しての信仰である。ゲーテが活躍したドイツの革新的な文学運動であるシュトゥルム・ウント・ドラングも啓蒙主義に異議を唱え、理性に対して感情を主張する運動であった。この運動に参加した詩人たちは思考の合理性に対して、信仰の直接性と心の避けられない必要性で対抗しようとしていた。その中の代表的な作品は、まさに「心」という言葉が頻繁に使われる、ゲーテの『若きヴェルターの悩み』である。

ゲーテはさらに詩と宗教の共通点について「詩文（文学）⁵⁴においては不可能なものにたいするある種の信仰が、宗教においては不可説な（不可測な）⁵⁵ものにたいする同様な信仰が生ずるはずである。」⁵⁶と述べている。彼によるとその共通点は、「不可能なもの」と「不可説なもの」に対する信仰である。従って宗教と詩における信仰の力は、人々を分裂させようとする力に対しての、人々を結合する力なのではないか。

第3章 詩文と芸術における真理と神的なもの

本章では、「真実は神に似ている。直接には現われず、わたしたちはその示顕によって真実を推測するほかはない。」⁵⁷というゲーテの発言に基づき詩文と芸術における神的なものについて論じる。「真実は神に似ている。」⁵⁸とゲーテは、真実と神をほぼ同等のように扱っている。彼は、全てのものに対して、目に見えない真実、あるいは神、あるいは神的なもの、を感じ、認識している。それらのものが全てのものごとに顕現していることは、ゲーテの汎神論的生命観であった。

さらにゲーテは1825年『気象学の試み』(*Versuch einer Witterungslehre*)

の「はじめに一般的なことを」の中で次のように述べている。「真理は神のものと同じで、われわれにはけって直接に認識できない。われわれが目にするのは、その残照、例、象徴といった、個別の類縁現象にすぎない。われわれはそれを把握しがたい生命とは認めながらも、把握したいという望みはあきらめきれない。」⁵⁹ここでは、ゲーテは真理と神のものを同等にしている。

直接に認識できない神のものは残照、例、象徴といった、個別の類縁現象を通して目に見えるようになる。なかなか把握できない生命を把握できるようになることはゲーテの望みであった。このような望みはゲーテの真実と神的なものへの探求の精神を示している。

以上で述べたように、ゲーテは自然研究者としては汎神論者であり、自然のあらゆるものにおいて神的なものを探究し、認識している。そして彼は詩人として、また芸術家としては多神論者であるが、すべての詩文と芸術において汎神論的な見方で神的なものを見出していることを、本章で論じる。

第1節 詩文における真理と神的なもの

ゲーテの引用文「真実は神に似ている。直接には現われず、わたしたちはその示顕によって真実を推測するほかはない。」⁶⁰を踏まえて、シムはゲーテにとって「詩文や世界と社会の道徳的秩序は、真理へのまなざしと、神的なものへの啓示を開くのである。」⁶¹と結論付けている。ゲーテは草と石の中だけでなく、詩文や世界と社会の道徳的秩序の中でも神的なものを認識している。作家としての詩人、芸術家のゲーテは多神論者であるが、鑑賞者としての詩人、芸術家のゲーテは、詩においても、芸術においても汎神論的な見方で神的なものを見出し、認識している。

詩文（文学）⁶²は自然の秘密を指向し、これを形象（Bild）によって解こうとする。哲学は理性の秘密を指向し、これを言葉によって解こうと

ゲーテのスピノザ主義に基づいた宗教的哲学・詩文・芸術・自然研究の概念（89）

する（自然哲学、実験哲学）。神秘主義は自然と理性の秘密を指向し、これを言葉と形象によって解こうとする。⁶³

詩文は形象によって自然の秘密を指向している。哲学は言葉によって理性の秘密を指向している。ここでゲーテは、詩文を「言葉」ではなく「形象」によって解こうとする、ゆえに、彼にとって詩文とは「形象」である。ゲーテは、詩文とは言葉を使いながら、「形象」のようなものを作り出しているもの、と思っている。このような「形象」によって、詩文は自然の秘密を指向している。ここで言い加えることは、宗教のテキストもこのような詩文を用いていることである。

ゲーテが自然研究者として自然を探究している姿は、詩人として詩文を書く姿の中にもある。それは彼が詩人として「自然の秘密」を指向しているからである。

『詩と真実』の第16章のスピノザについてのパラグラフの中で、ゲーテは自身の「うちにある詩的天分」について次のように述べている。

私は私のうちにある詩的天分を、しだいにまったく自然として考えるようになっていた。私は外的な自然を私の詩的天分の対象として眺めるように生まれついていただけに、なおさらそうであったのである。このような詩的天分の発言は、もちろんなんらかの誘因によって呼び起こされ規定されることもあったが、もっとも喜ばしくもっとも豊かにそれが現われるのは、無意識のうちに、むしろ意思に反して現われてくる場合であった。⁶⁴

ゲーテは彼の「うちにある（内的な）詩的天分」をまったく自然として考えて、生まれつきのものとして捉えている。彼はさらに「外的な自然」も同じ自然の一部として捉えている。「うちにある（内的な）詩的天分」と「外的な自然」は両方とも同じ自然に所属して、一体である。この詩的天分は、無意識のうちに、意思に反して現れる、自然の創造力である。

以上で述べたようにゲーテは詩人として多神論者であり、多神論的テーマを扱っているが、彼の詩的天分・才能そのものは自然の一部であるゆえに、汎神論的である。その上に鑑賞者としての詩人のゲーテは、詩において汎神論的な見方で神的なものを見出し、認識している。

第2節 芸術における真理と神的なもの

ゲーテは主に詩人として有名であったが、芸術にも興味を持っていて、絵を描き、芸術について論じて、芸術作品を深く鑑賞し、解釈しようとした⁶⁵。彼は1790年の春にヴェネツィアに滞在している際に、聖母マリアのギリシャのイコン（トルコから亡命していたギリシャのオースドックスなキリスト教徒の聖画像）に対する印象を1790年4月の日記の中に次のように述べている⁶⁶。「絵は聖なるものを表現し、聖なるものは絵によって崇拝されるようになった。こうして宗教と芸術の概念は渾然一体となった。」⁶⁷この言葉は、鑑賞者としての芸術家の発言と捉えればよい。ゲーテはキリスト教の聖なるものを表現する絵を観察し、「宗教と芸術の概念は渾然一体」ということに気づいた。彼はさらに芸術と宗教の概念を『ゲーテの散文からの言葉』(*Sprüche in Prosa*)の日付のない遺稿(undatierter Nachlass)の中で次のように区別している。

芸術は一種の宗教的感覚を、深いゆるぎない厳粛を基礎としている。そのためもあって、芸術は好んで宗教と一つになりたがる。宗教は芸術感覚を必要としない。それ自身の厳粛を基礎としているからだ。宗教は趣味を与えることがないと同様に、また、芸術感覚を授けることもしない。⁶⁸

ゲーテによると、宗教は自身の厳粛を基礎としているから、もともと芸術感覚を必要としない。だが芸術も宗教を必要としないが、芸術は、一種の宗教的感覚や、深くゆるぎない厳粛を基礎としているゆえに、芸術と宗教が一

体となることは少なくない。したがって、宗教の芸術的表現が、この世には多く存在するのだと思われる。このできごとはキリスト教においてだけではなく、他の宗教にもあるが、このテーマに関してはさらなる研究が必要である。

ゲーテにとって芸術や美こそは永遠なるものと神的なものの啓示を示している。宗教的なものと芸術的なものはたがいに前提条件となっている。それはゲーテがナザレ派とラファエロ、レンブラントの芸術を例にとって（特にイタリア旅行で）詳述しているように、造形芸術の広い部分にも通じる⁶⁹。

ゲーテは1787年9月6日に、それは2番目のローマ滞在（1787年6月－1788年4月）の時であったが、次のように述べている。「これらの高度な芸術作品は、同時に人間の自然の作品でもあり、真実と自然の法則に従って生み出されたものである。恣意的なものや空想されたものの一切が合致して、そこに必然性が生じ、そこに神がいるのだ。」⁷⁰ゲーテは、神が芸術、特に古代の芸術の中にも身をひそめ、その中に表現されることを確信していた。このような「人間の自然の作品」は「真実の自然の法則」に従って生み出されたものである。

以上で述べたようにゲーテは詩人と芸術家として多神論者であるが、芸術の鑑賞者としては芸術品を自然の一部として捉えて、汎神論的な見方をしていく。

ゲーテは真実の宗教に関して次のように述べている。「真実の宗教は二つしかない。一つは、わたしたちの内部と周囲に住む神聖なものを、まったく形なしに認め、崇めるものであり、もう一つは、その神聖なものをもっとも美しい形で認め、崇めるものである。その中間にあるものはすべて偶像崇拜である。」⁷¹ゲーテにとって認め崇めるものは基本的に二つである。一つは目に見えない形を取る神聖なものである。もう一つは目に見えるもっとも美しい形をとるものである。ゲーテはこの二つのものを真実の宗教と呼んでいる。両方の真実の宗教は信仰そのものを表している。形なしの神聖なもの(神

的なもの、魂、エンテレヒー的なもの、力など)へ信仰と、もっとも美しい形あるもの(自然、宗教のもっとも美しい芸術的表現)への信仰であろう。「その中間にあるものはすべて偶像崇拜である」ゆえに、ゲーテは宗教の芸術的表現をもっとも厳しい目で観察しているといえる。

次にゲーテは芸術、芸術品について考察し、解釈しながら、芸術家についてのあり方、創造仕方についても論じている。ゲーテは1827年3月30日のレオポルディーネ・グルストナー・フォン・グルスドルフ(Leopoldine Grustner von Grusdorf)宛の手紙の中で次のように述べている。

もしあなたが私のこの提案を受け入れ、その有効性を信じられるなら、書面で、いやむしろ絵によってそれを表明されるのを知りたいと思います。その際わたしが何度でも繰り返して申し上げたいのは、造形芸術家はまずもって力強い現実によって徹底的にみずからを鍛えなければならず、その結果はじめて現実から理念的なものを発展させ、そして最後には宗教的なものの高みにまで登ることができるということです。⁷²

ゲーテによると、造形芸術家は現実から理念的なものへ、そして最後に宗教的なものへの創造を目指すべきである。優れた芸術家になるためにはたえず訓練がいる。この道は過程に過ぎない。もっとも完成した宗教的なものを創るためにはまず、力強い現実において徹底的に自らを鍛える必要がある。

第4章 自然と芸術

ゲーテがフランスの哲学者、美術批評家、作家であるドゥニ・ディドロ(Denis Diderot, 1713-1784)の批評論『絵画論』*Essai sur la peinture* (1766)をフランス語からドイツ語に翻訳し、コメントを付したものはドイツ語で *Diderots Versuch über die Malerei* (1799) という。その中にゲーテの芸術についての考察もあり、彼は次のように述べている。

自然は自分のために活動しているように見える。芸術家は人間として、人間のために活動している。（省略）芸術家が、自らを生んでくれた自然に対して、感謝を込めながら、感じ考え、人間らしく仕上げられたもう一つの自然を、自然に対し報じる。このためには、天才であり、選ばれた芸術家は、法則とルールに従って行動しなければならない。この法則とルールは自然が定めた、自然に反しないものである。芸術家の一番大きい富であるこの法則とルールを通して、芸術家は自然の大きな富と自身の心情の豊かさを制し使うことを学んでいる。⁷³

ゲーテによると、自然に対し報じる芸術品を生み出すためには、芸術家は自然が定めた法則とルールに従わなければならない。このような法則とルールに従えば芸術家は自然の富も、自身の心情の富も完璧に使用することができるようになる。ただし、そのためには訓練が必要であろう。芸術家が自然の法則を深く理解すればするほど、さらに現実によって徹底的に自らを鍛えれば鍛えるほど、「現実から理念的なものを発展させ、そして最後には宗教的なものの高みにまで登る」ことができ、もっとも美しい宗教的芸術品を創ることができるといえる。と同時に、「人間は宗教的であるかぎり、詩文と芸術において多作である」⁷⁴ ゆえに、優れている芸術品を創るためには芸術家自身の宗教性も求められている。

ゲーテは1802年にラウハシュテットの新しく開館された劇場のために小戯曲『われわれがもたらすもの』（*Was wir bringen*, 1802）を書いた。その中に古典期におけるゲーテの芸術観を端的に示している次のソネットがある⁷⁵。ソネットに出てくる自然を代表する妖精は次のように述べている⁷⁶。

自然と芸術はたがいに避けあっているようにみえて
いつのまにか手を結んでいた
わたしの反抗心も消えたいまは

両者がひとしくわたしを惹きつける

おそらく大切なのは着実な努力だけだろう
日々規則ただしく全身全霊をうちこんで
芸術につながろうとするとき
自然もののびやかに心のなかに開花するらしい

およそ形成とはそうしたものだ
放縦な精神に
どうして純粹無垢が達成できよう

大事をめざすものは自己集中しなければならぬ
制約のなかではじめて巨匠がうまれ
規則だけがわれわれに自由をあたえる⁷⁷

演劇術を代表する少年は妖精（自然）を狙っているが、妖精が逃げようとしている時にメルクルが少年と妖精に対し、二人で舞台の歓喜を高揚させるべきだと言って、二人を協力させる⁷⁸。ソネットの最後の行で「規則」という訳語・言葉が使われているが、原文では Gesetz⁷⁹ が使われており、それは「法」あるいは「法則」とも翻訳することができる。自然を代表する妖精は、大事をなすためには法則・規則の自由が必要であると強調しているゆえに、自然の法則に従えば、大きな成果を出すことができる。作品を生み出すためには芸術家は、自然が定めた、自然に反しない法則とルールに従って行動しなければならない⁸⁰。

このような自然が定めた法則は、スピノザが説いている法則を思い出させ、ゲーテが解釈し描写する「自然は、永遠の、必然的な、神自身でさえなんら変更することのできない神的な法則」と関連することができる。ゲーテはすべてのものにおいて神的なものを認識するように、すべてのものにおいて、

すなわち芸術と詩文の創造仕方においても、自然の法則を認識しているといえる。

おわりに

ゲーテは我々にはけっして直接に認識できない真理が神のものとと同じで「われわれはそれを把握しがたい生命とは認めながらも、把握したいという望みはあきらめきれない。」⁸¹と考えている。「世界をその最も奥深いところで総べているもの」⁸²や「生命」そのものを認識し、把握したいというのはゲーテにとって最大の望みであった。

あらゆるものごとにおいて真理、神的なものを認識し、見出すゲーテは『詩と真実』の中で「自然は、永遠の、必然的な、神自身でさえなんら変更することのできない神的な法則に従って働いている」と述べて、スピノザに踏まえて自信の生命観を描写している。

本論文では、ゲーテは詩人と芸術家と自然研究者として、詩文と芸術と自然の中で真理、神的なものを見出し、認識していることを明確にした。詩文は自然の秘密を指向して、形象を通して解こうとしている。芸術作品は自然の法則に従って創るならば、優れている作品となるということが分かった。

同じようなゲーテの探求精神は宗教思想の探求にも見られる。ゲーテは生涯に渡って、あらゆる宗教思想を研究していた。このような探求は真理、神的なものへの探究として捉えることができる。しかし、彼は教会的な意味では、キリスト教徒ではなかったことも分かった。一番大きい影響を受けたのはスピノザの『エチカ』からであったが、ゲーテは純粋なスピノザ主義者でもなかった。なぜなら、ゲーテはスピノザの哲学を独自に解釈し、スピノザが直接表現しなかった輪廻の概念を表現している。

自然研究者としてゲーテは、スピノザの「神即自然」(deus sive natura)の概念を用いて自然を汎神論者の目で研究している。この意味において、ゲーテにとって自然研究は、自然を研究し、発見することだけではなく、最終的

には神的なものへの探求であるといえる。自然研究は、ゲーテが表現している「自然は、永遠の、必然的な、神自身でさえなんら変更することのできない神的な法則」への理解を深めるためである。そして不可説なものを説明できるようにするための試みであろう。

以上のことから、ゲーテの作品の中には、キリスト教の聖者だけでなく、神話や歴史上の人物や、いくつもの教派などが現われる、ということからゲーテは、詩人として多神論者であり、多神論的テーマを扱っていることが分かる。作品の作り手としての詩人または芸術家のゲーテは多神論的な考えを持っているが、作品の鑑賞者としての詩人または芸術家のゲーテは、汎神論的な見方で神的なものを見出し、認識している。

ゲーテが自然研究者として自然を探究している姿は、詩人として詩文を書く姿とも重なる。それは彼が詩人として「自然の秘密」を指向しているからである。芸術家が自然の法則を深く理解すればするほど、また現実によって徹底的に自らを鍛えれば鍛えるほど、「現実から理念的なものを発展させ、そして最後には宗教的なものの高みにまで登る」ことができる。そして美しい宗教的芸術品を創ることができる。と同時に、「人間は宗教的であるかぎり、詩文と芸術において多作である」⁸³の言葉通り、優れている芸術品を創るためには芸術家自身の宗教性も求められている。ゲーテはすべてのものにおいて神的なものを認識するように、芸術と詩文の創造の仕方においても、自然の法則を認識しているといえる。ゲーテの精神の大きさと、生命に対する理解と探究心があったからこそ、彼は、すべてのものごとにおいて、真理と神的なものを見出し、認識することができたといえる。

ゲーテの作品『詩と真実』から、詩と宗教の共通点は、「不可能なもの」と「不可説なもの」に対する信仰である、と解釈できる。宗教と詩における信仰の力は、人々を分裂させようとする力に対しての、人々を結合する力だと考えられる。

ゲーテは宗教と詩文、宗教と哲学、宗教と芸術について論じている。哲学においては基本的に理性、または批判が基盤となる。それに対して、詩文、

童話、さらに宗教においては、理性と批判ではなく、主に信仰と想像性が基盤となっている。

詩と宗教と哲学を別のものとして捉えることは多いと思われるが、古代の作品にあるように、この三つのものがそろった場合のある種の力にゲーテは感づき、ゆえに哲学が含まれた宗教的詩文にものごとを統一できる力を感じ、同じような統一感を自身の作品にも出そうとしていたと考えられる。

今後の研究課題としては、ゲーテが残された数多くの自然研究に関する随筆を確認しながら、自然研究とゲーテの宗教性についての様々な発言を調べて、さらなる研究が必要である。

参考文献

【1 ゲーテ自身の著作】

(ドイツ語)

Goethe, Johann Wolfgang: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 in 45 Bänden in 2 Abteilungen, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1993-1999.

1. Abteilung:

- Bd. 1: *Gedichte*. 1756-1799. Hrsg. von Karl Eibl, 1987. (略号: FA 1)

- Bd. 2: *Gedichte*. 1800-1832. Hrsg. von Karl Eibl, 1988. (略号: FA 2)

- Bd. 12: *Bezüge nach aussen. Übersetzungen II. Bearbeitungen*. Hrsg. von Hans-Georg Dewitz, 1999. (略号: FA12)

- Bd. 13: *Sprüche in Prosa. Sämtliche Maximen und Reflexionen*. Hrsg. von Harald Fricke, 1993. (略号: FA13)

- Bd. 14: *Dichtung und Wahrheit*. Hrsg. von Klaus-Detlef Müller, 1986. (略号: FA 14)

- Bd. 15/1 *Italienische Reise I*. Hrsg. von Christoph Michel und Hans Georg Dewitz, 1993. (略号: FA15/1)

- Bd. 20: *Ästhetische Schriften*. 1816-1820. *Über Kunst und Altertum I-II*. Hrsg. von Hendrik Birus, 1999. (略号: FA 20)

- Bd. 25: *Schriften zur allgemeinen Naturlehre, Geologie und Mineralogie*. Hrsg. von Wolf von Engelhardt und Manfred Wenzel, 1989. (略号: FA 25)

2. Abteilung:

- Bd. 2 (29): *Briefe, Tagebücher und Gespräche. Das erste Weimarer Jahrzehnt. 1775-1786*. Hrsg. von Hartmut Reinhardt, 1997. (略号: FA 29)

- Bd. 3 (30): *Briefe, Tagebücher und Gespräche. Italien – im Schatten der Revolution. 1786-1794*. Hrsg. von Karl Eibl, 1991. (略号 : FA 30)
- Bd. 7 (34): *Briefe, Tagebücher und Gespräche. Napoleonische Zeit II. 1812-1816*. Hrsg. von Rose Unterberger, 1994. (略号 : FA 34)
- Bd. 10 (37): *Briefe, Tagebücher und Gespräche. Die letzten Jahre I. 1823-1828*. Hrsg. von Horst Fleig, 1993. (略号 : FA 37)
- Bd. 11 (38): *Briefe, Tagebücher und Gespräche. Die letzten Jahre II. 1828-1832*. Hrsg. von Horst Fleig, 1993. (略号 : FA 38)

(日本語)

- ゲーテ : 『ゲーテ全集』 神品芳夫ほか訳 潮出版社 1979—1992, 新装普及版 2003.
- 第1巻 : 「詩集」 山口四郎訳 1979. (略号 : 『ゲーテ全集 1』)
 - 第2巻 : 「詩集」 山口四郎編 1980. (略号 : 『ゲーテ全集 2』)
 - 第3巻 : 「ファウスト・ウルファウスト」 山下肇訳 前田和美訳 1992. (略号 : 『ゲーテ全集 3』)
 - 第6巻 : 「若きヴェルターの悩み」 神品芳夫訳 1979. (略号 : 『ゲーテ全集 6』)
 - 第9巻 : 「詩と真実」 山崎章甫・河原忠彦訳 1979. (略号 : 『ゲーテ全集 9』)
 - 第10巻 : 「詩と真実」 河原忠彦・山崎章甫 1980. (略号 : 『ゲーテ全集 10』)
 - 第13巻 : 「文学論・箴言と省察」 小岸昭訳 岩崎英二郎・関楠生訳 1980. (略号 : 『ゲーテ全集 13』)
 - 第14巻 : 「気象学」 轡田収訳 1980. (略号 : 『ゲーテ全集 14』)

(日本語 : その他)

ゲーテ : 『ファウスト』 第1部, 相良守峯訳 岩波文庫 1958.

【2 ゲーテ以外の著作, 研究書】

(ドイツ語, 英語)

Bollacher, Martin: *Der junge Goethe und Spinoza. Studien zur Geschichte des Spinozismus in der Epoche des Sturms und Drangs*. Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1969.

Colombo, Gloria (2013): Goethe und die Seelenwanderung. In: *Goethe-Jahrbuch 2012*, Bd. 129, Wallstein Verlag, Göttingen, 2013, S. 39-47.

Dilthey, Wilhelm: *Das Erlebnis und die Dichtung*. Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1970.

Goethes Gespräche. Bd. 2, hrsg. von Woldemar Freiherr von Biedermann, Band 1–10,

Leipzig 1889–1896.

Mommsen, Katharina: *Goethe und die arabische Welt*. Insel Verlag, Frankfurt am Main, 1988.

Mommsen, Katharina: *Goethe und der Islam*. Herausgegeben von Peter Anton von Arnim, Insel Verlag, Frankfurt am Main, 2001.

Simm, Joachim: *Goethe und die Religion. Aus seinen Werken, Briefen, Tagebüchern und Gesprächen*. Insel Verlag, Frankfurt am Main, 2000.

Thielicke, Helmut: *Goethe und das Christentum*. R. Piper & Co. Verlag, München, 1982.

Totok, Wilhelm: *Handbuch der Geschichte der Philosophie, Frühe Neuzeit*. Band IV, Unter Mitarbeit von Erwin Schadel et al. Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1981.

(日本語)

ビーダーマン編：『ゲーテ対話録2』 菊池栄一訳 白水社 1963.

ボルノー ,O.F.: 『生の哲学』 玉川大学出版部 1975.

エッカーマン：『ゲーテとの対話 (中)』 山下肇訳 岩波書店 2001.

ヘルムート・ティーリケ：『ゲーテとキリスト教』 田中義充訳 文芸社 2003.

【本論文筆者の博士論文】

ツグラッゲン, エヴェリン：「ゲーテにおける『生命哲学』の研究 ―自然詩文・永遠・輪廻・行為― Studies in the Life Philosophy of Goethe - Natural Poetry, Eternity, Metempsychosis, Deed」『創価大学・創価女子短期大学学術機関リポジトリ』2017.
<http://hdl.handle.net/10911/4983> (略号：ツグラッゲン)

注

1 『ゲーテ全集3』, 105 ページ。

2 Simm, Heinrich Joachim: *Goethe und die Religion*, 2000.

3 „Poesie deutet auf die Geheimnisse der Natur“ *Religion und Kunst*. (Simm (2000: 383-395))

4 O.F. ボルノー (1975) 『生の哲学』, 18 – 27, 90 – 92 ページと Dilthey, Wilhelm: *Das Erlebnis und die Dichtung*, 1970, S. 126 と Bollacher, Martin: *Der junge Goethe und Spinoza. Studien zur Geschichte des Spinozismus in der Epoche des Sturms und Drangs*, 1969などを参照。

5 „von der frühen Protestantismuskritik über pantheistische Glaubensinhalte bis zum späteren Humanitätsideal und zur Altersmystik, wenn er – zu Wielands Tod 1813 und in den Gesprächen mit Eckermann – seine Gedanken zur Transzendenz und zur Wiedergeburt explizit formuliert.“ (Simm (2000: 12) 筆者訳：ツグラッゲン, 58 ページ

)

- 6 Wilhelm Totok (1981) 参照。
- 7 ツグラッゲン, 100 ページ。
- 8 „Mir bleibt Christus immer ein höchst bedeutendes, aber problematisches Wesen.“ (FA 38, 278. 筆者訳)
- 9 『ゲーテ全集 10』, 179 ページ。
- 10 „Ich für mich kann, bei den mannigfaltigen Richtungen meines Wesens, nicht an einer Denkweise genug haben; als Dichter und Künstler bin ich Polytheist, Pantheist hingegen als Naturforscher, und eins so entschieden als das andre. Bedarf ich eines Gottes für meine Persönlichkeit, als sittlicher Mensch, so ist dafür auch schon gesorgt. Die himmlischen und irdischen Dinge sind ein so weites Reich, daß die Organe aller Wesen zusammen es nur erfassen mögen.“ (FA 34, 147. 筆者訳)
- 11 „Hier bin ich auf und unter Bergen, suche das göttliche in herbis und lapidibus.“ „von einem göttlichen Wesen die Rede ist, das ich nur in und aus den rebus singularibus erkenne“ (FA 29, 583-584. 筆者訳: ツグラッゲン, 192 ページ)
- 12 この詩は『ゲーテ全集 1』, 210 - 212 ページに収められている。ドイツ語版は FA 1,316-318 に所収。
- 13 『ゲーテ全集 1』, 418 ページ参照。
- 14 Simm (2000: 9-10) を参照。
- 15 „Mir bleibt Christus immer ein höchst bedeutendes, aber problematisches Wesen.“ (FA 38, 278. 筆者訳)
- 16 „Goethe hat die Religion, das Nachdenken über Religion, in einzigartiger Weise in sein Werk und in seine Sprache integriert. Und dabei nahm er sich zu jeder Zeit die Freiheit des Widerspruchs, auch gegen eigene Positionen.“ (Simm (2000: 11) 筆者訳: ツグラッゲン, 96 ページ)
- 17 „Hier geht es darum zu zeigen, daß religiöses Denken, ja der Glaube Goethes Leben und Werk grundieren, seine Weltanschauung seine Sprache bestimmen.“ (Simm (2000: 12) 筆者訳)
- 18 „Das Göttliche zu enthüllen, wo es sich auch verberge, war sein Anliegen. Zugleich aber war er stets darum bemüht, das, was er wirklich glaubte, zu verhüllen oder in ein poetisches Bild zu fassen. Damit zeigt sich auch in religiösen Fragestellungen Goethes grundsätzliches Denkmuster: die Vereinigung der Widersprüche, die Synthese im Sinne von Polarität und Steigerung.“ (Simm (2000: 9) 筆者訳)
- 19 ヘルムート・ティーリケの『ゲーテとキリスト教』 (*Goethe und das Christentum*, 田中義充訳, 文芸社, 2003) などというゲーテとキリスト教についての数多くの先行研究がある。
- 20 カタリーナ・モムセンの『ゲーテとアラブ世界』 (Mommssen, Katharina: *Goethe*

und die arabische Welt. 1988) と『ゲーテとイスラム』(Mommesen, Katharina: *Goethe und der Islam*. 2001) というゲーテとイスラムについての先行研究がある。

- 21 Colombo, Gloria (2013): Goethe und die Seelenwanderung. In: *Goethe-Jahrbuch* 2012, Bd. 129, 2013, S. 41-42 など。
- 22 「ゲーテの先輩であるヘルダーは仏教について『人類歴史哲学考』の中のいくつかの箇所で「釈迦の宗教」について述べている。ゲーテは主に、ケンペルの『日本誌』、シュロッサーの『輪廻に関する二つの対話』、ヘルダーの『人類歴史哲学考』の東洋仏教の思想を取り上げている作品から、仏教思想についての知識を得たと考えられる。」(ツグラッゲン (2017) 171 ページ) など。
- 23 Simm (2000: 223-320) 参照。
- 24 “Die Geheimnisse, sagte G., habe er zu groß angefangen, wie so vieles. – Die 12 Ritter sollten die 12 Religionen (?) sein und alles sich nachher absichtlich durcheinanderwirren, das Wirkliche als Märchen und dies umgekehrt als die Wirklichkeit erscheinen.”(FA 34, 484. 筆者訳)
- 25 ゲーテ (1958) 『ファウスト 1』, 34 ページ。
- 26 ヘルムート・ティエリケ『ゲーテとキリスト教』, 2003, 167-168 ページを参照。
- 27 『ゲーテ全集 9』, 196 ページ。
- 28 „Die Menschen sind nur so lange productiv in Poesie und Kunst, als sie noch religiös sind; dann werden sie bloß nachahmend und wiederholend; wie wir auf das Alterthum, dessen Monumente alle Glaubenssachen waren und von uns nur aus und um Phantasterei und phantastisch nachgemacht werden.” (*Goethes Gespräche*. Bd. 2, 1889–1896, S. 322. 筆者訳) ビーダーマン編 (1963) 『ゲーテ対話録 2』 菊池栄一訳 白水社の和訳文には少し古いところがあるゆえに、原文から翻訳した。
- 29 「文学」を「詩文」に入れ替えた。
- 30 『ゲーテ全集 9』, 196 ページ。
- 31 「文学」を「詩文」に入れ替えた。
- 32 FA 14, 243
- 33 『ゲーテ全集 9』, 195 ページ。
- 34 FA 13, 198
- 35 「文学」を「詩文」に入れ替えた。
- 36 FA 13, 198
- 37 「文学」を「詩文」に入れ替えた。
- 38 FA 13, 198
- 39 FA 13, 198
- 40 『ゲーテ全集 13』, 341 ページ。
- 41 『ゲーテ全集 6』, 5 – 102 ページ。
- 42 「文学」を「詩文」に入れ替えた。

- 43 FA 14, 243
- 44 「不可測な」を「不可説な」に入れ替えた。
- 45 FA 14, 243
- 46 『ゲーテ全集 9』, 196 ページ。
- 47 エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話 (中)』, 216 ページ。
- 48 „Der Aberglaube ist die Poesie des Lebens, deßwegen schadet's dem Dichter nicht abergläubisch zu seyn.“ (FA 13, 21. 筆者訳)
- 49 『ゲーテ対話録 2』, 106 ページ。
- 50 『ゲーテ全集 13』, 347 ページ。 „Mährchen das uns unmögliche Begebenheiten unter möglichen oder unmöglichen Bedingungen als möglich darstellt.“ (FA 13, 184)
- 51 『ゲーテ全集 13』, 347 ページ。 „Roman der uns mögliche Begebenheiten unter unmöglichen oder beynahe unmöglichen Bedingungen als wirklich darstellt.“ (FA 13, 184)
- 52 „Wenn sich über mannichfaltige Vorkommenheiten der Zeit die Menschen entzweien, so vereinigt Religion und Poesie auf ihrem ernsten tiefem Grunde die sämmtliche Welt.“ (FA 20, 423. 筆者訳)
- 53 „Poesie habe doch immer etwas Versöhnendes, wenn sie uns mehr zum Überschauen, als zu einer besondern Theilnahme auffordert.“ (FA 34, 430. 筆者訳)
- 54 「文学」を「詩文」に入れ替えた。
- 55 「不可測な」を「不可説な」に入れ替えた。
- 56 『ゲーテ全集 9』, 196 ページ。
- 57 『ゲーテ全集 13』, 204 ページ。
- 58 『ゲーテ全集 13』, 204 ページ。
- 59 『ゲーテ全集 14』, 273 ページ。
- 60 『ゲーテ全集 13』, 204 ページ。
- 61 „Die Poesie und die sittliche Ordnung der Welt, der Gesellschaft eröffnen einen Blick auf die Wahrheit, den Vorschein des Göttlichen.“ (Simm (2000: 17) 筆者訳)
- 62 「文学」を「詩文」に入れ替えた。
- 63 『ゲーテ全集 13』, 341 ページ。
- 64 『ゲーテ全集 10』, 222 ページ。
- 65 FA 15/1, 422 参照。
- 66 FA 30, 955-958 参照。
- 67 „Das Bild stellte heilige Dinge vor und die heiligen Dinge gewannen durch das Bild die Verehrung. So amalgamirt war der Begriff von Religion und Kunst.“ (FA 30, 541. 筆者訳)
- 68 『ゲーテ全集 13』, 310 ページ。
- 69 Simm (2000:385) を参照。

- 70 „Diese hohen Kunstwerke sind zugleich als die höchsten Naturwerke von Menschen nach wahren und natürlichen Gesetzen hervorgebracht worden. Alles Willkürliche, Eingebildete fällt zusammen, da ist die Notwendigkeit, da ist Gott.“ (FA 15/1, 424. 筆者訳)
- 71 『ゲーテ全集 13』, 212 ページ。
- 72 „Wie Sie diese meine Vorschläge aufnehmen und sich von Brauchbarkeit derselben überzeugen, wünsche schriftlich, mehr aber bildlich ausgedrückt zu erfahren; wobei ich denn aber- und abermals wiederhole, daß der bildende Künstler sich zuerst an der kräftigen Wirklichkeit vollkommen durchüben müsse, um das Ideelle daraus zu entwickeln, ja zum Religiösen endlich aufzusteigen.“ (FA 37, 461. 筆者訳)
- 73 „Die Natur scheint um ihrer selbst zu wirken, der Künstler wirkt als Mensch, um des Menschen willen. (. . .) so gibt der Künstler, dankbar gegen die Natur, die auch ihn hervorbrachte, eine zweite Natur, aber eine gefühlte, eine gedachte, eine menschlich vollendete zurück. Soll dieses aber geschehen, so muß das Genie, der berufne Künstler nach Gesetzen, nach Regeln handeln, die ihm die Natur selbst vorschrieb, die ihr nicht widersprechen, die sein größter Reichtum sind, weil er dadurch sowohl den großen Reichtum der Natur als den Reichtum seines Gemüts beherrschen und brauchen lernt.“ (FA 12, 432. 筆者訳)
- 74 前掲注 (28)
- 75 『ゲーテ全集 2』, 451 ページと FA 2, 1320 を参照。
- 76 FA 2, 1320 参照。
- 77 『ゲーテ全集 2』, 61 ページ。
- 78 FA 2, 1320 参照。
- 79 FA 2, 839.
- 80 FA 12, 432 参照。
- 81 『ゲーテ全集 14』, 273 ページ。
- 82 ゲーテ (1958) 『ファウスト 1』, 34 ページ。
- 83 前掲注 (28)